
がくれボ！～学園レボリューションズ～

桜月の夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

がくれボ！〜学園レボリユーションズ〜

【Nコード】

N3006E

【作者名】

桜月の夜

【あらすじ】

普通より少し魔法が多い。主人公はそんな魔法学園に通う一年生、天宮良。魔力のみはトップクラスだが杖で魔法が使えない落ちこぼれ。本日も失敗談を保健室教員に話していたところ、一人の生徒に合う。そこから良の日常は少しずつ変わっていく。日常より少し離れた学園物語。

プロローグ

いつだって、自分は一人ぼっちだと思っていた。
まるで自分だけ、この世界から切り離されたかのような、そんな感じ。

大好きだった両親も、仲の良かった友達も、みんな俺を避けていく。
なんで。

自分がこんな力を持っているから？

俺はこんな力じゃない。

大切な人との関係を裂くようなこんな力、いない。

俺はただ、温もりが欲しいだけなんだ。

あの頃の温もりが。

暖かくて、優しい温もり。

けれど同時に、叶えられない夢とも思った。

そんな途方に暮れていたとき。

麻帆良に來ないかと誘いがあったのは。

「むう・・・」

麻帆良学園、学園長、近衛近右衛門は悩んでいた。

近頃は物騒な世の中である。

学生たちが不審者に襲われるという事件があってもおかしくない。

生徒たちの安否が心配である。

というよりも、孫のこのかが。

重度の孫好きである学園長にとって、孫のこのかに手を出されるのは、許し難い事なのだ。

というわけで、学園長は手を打った。

孫心配性の学園長は、このかのにいる女子中等部2・Aに護衛兼転校生という形で、新しい生徒を招くのだ。

もうすぐ、この扉が開かれ入ってくるはずだ。

着いた。

急に学園に来てくれと言われて、まだ数日しか立っていない。
しかし、緊張はなかった。

ここの学園長にこないかと誘われたとき、学園長は自分の力を知っていた。

知っていた上で、来てくれと言ったのだ。

素直に嬉しかった。

自分の力を受け入れてくれる。

初めてだった。

だから楽しみなのだ。

これからの生活が。

この学園に転校生として招かれたのは知っている。

正直、勉強は面倒だが、クラスに転校するのは絶対条件なので、そこは仕方がない。とにかく、これからの学園生活に心踊る自分が確かにいた。

そして今、この扉を開き、中に入る。

「よく来たの」

「この度の件はありがとうございます学園長」
少年は礼儀正しく一礼する。

「うむ。では早速、君の役割について説明しようかの」

学園長はその長い髭を撫でるように触る。

「君も知つての通り、君には我が麻帆良学園の女子中等部に転入してもらおう」

「え……？」

啞然としたように、一言だけ言葉を漏らす。

「何か問題でもあるかの？」

「あの……女子中等部に転入なんて一言も聞いてないですよ？聞き覚えのない言葉に、次第に不安が募ってくる。

「まあいいわい。それで君には影の任務としてこの麻帆良学園の警備員もしてもらいたいのだが……」

「ちよつとまってください！」

開口一番、学園長の言葉遮る。

「何ですか女子中等部転入って！？ そんなの聞いてませんよ！」

「そんなことないで行つた覚えはないぞい」

自信満々に学園長は言う。

確かにそうである。

話があつたとき、この学園に転入するとしか聞いていないのだ。それをどう解釈するかは学園長次第である。

「嬉しいじやろう。女子たちに囲まれての学園生活」

「えつと、あの……」

言葉に詰まる。

今更なにかいつたところで通じるような相手ではないのは、火を見るより明らかだ。「では早速じゃが、市内の警備をしてもらおうかの」

「だから、その……」

必死に反論しようと言葉を出そうとするが、そんな余裕を与えてくれない。

「夕方になれば一旦こちらに戻ってくるのじゃぞ」

「……………」

もはや喋ろうとはしない。

「では期待しておるぞ、桜井依人君」
依人は渋々ながらに肯いた。

さて、どうしたものだろう。

警備とは言っても、ここは見れば見るほど事件などとは無縁そんな場所だ。

住んでいる人々もみなにこやかだし、通っている学生も見たところいい人に見える人が多い。そのせいか。

「おいおい姉ちゃん、これどうしてくれんの？」

ごく少人数側の人間が大変目立ってしまうわけで。

見たところ依人と同じくらいの年齢のツインテールの少女と黒髪のロングヘアーの少女が、不良ぶっている数人の男に絡まれていた。

というわけで。保健室教員（推定30歳）の意味の分からないテンションにより、状況が全く把握出来ないまま、良は生徒会室に連れてこられたのだった。

「ここが生徒会魔法執行部一年部室だよ」

と、紹介される。

ここで違和感を一つ発見する。

綺麗に片付けられた部屋。それなりに広く、大きなテーブルが中央に置いてある。

隅には簡単な台所までもが用意されている。

が、その違和感は確かにあった。

いくら部屋が綺麗でも隠しきれてない。

「人がない？」

そう。

この広々とした生徒会室の中。

現在は放課後だ。

生徒会が活動しているならば、放課後のこの時間帯は誰か部屋にいてもおかしくない。

もしかしたら全員どこかにボランティアにでもいつているのかもしれない。

最近は魔法奉仕活動も魔法使いの間では頻繁に行われているからな。そう自分に言い聞かせ、良は聞いてみた。「えっと、他の人は？ボランティアか何かで外出中とか？」

すると、急に黙り込む。そして、重たげな口を開いた。

「えっと…生徒会魔法執行部の一年部には、私しか所属してないんだ…」

予感的中。

つまり、半場人数合わせの為に、良はこの生徒会魔法執行部に入れられる事となったのだ。

「今、お茶出すから…！」

と言っていそいそとお茶の準備をする。

その姿がとても可愛らしく見えたのはほんの一瞬のことで、次の瞬間、見事にお茶を零した。

「……………」

「ま、またやつちゃったあゝ…」

その姿は実に可愛らしいことこの上ないのだが、同時に物凄い危なっかしさを感じるのは何故だろう？

その後。

連鎖反応並みの連続続きのミスを繰り返し、十分後。ようやく落ち着いていたのだ。（所要時間10分。そのうち、ミス2分。片付け8分）

「おかしいな。普段ならここまでミスしないのに…」

「って結局ミスするんじゃない！」

「天宮君と一緒にいるせいかな？」

「……………」

俺のせいだよ…。

というか、いつの間にか名前が覚えられていた。

「そつえば…」

よくよく考えてみれば、まだお互いにきちんとした自己紹介すらきちんとしてないのだ。

やはりここはするべきではと思い、良は行動に移る。

「そつえば私たちってまだ自己紹介ちゃんとしてないよね？」

どうやら先を越されたらしい。

「あ、ああ…」

とりあえず生返事で返す。

「私の名前は桜井紫音さくらいしおんって言うの。よろしくね」

実に愛想良く自己紹介してくれた。

「天宮良だ。よろしくな」

こちら側は、普段ない愛想良さを全力で出した感じである。というわけで。

無事に自己紹介も終了した。

紫音がコホンと軽く咳払いする。

「ようこそ、生徒会魔法執行部へ。よろしくね、天宮君」

この笑顔があればなんとかなるのかもしれない。「ああ、よろしくな」

ものは試し。まずはやってみてから考えるか。

失敗した。

思い返せば、あの時保健室教員の強引たる押しさえ断っておけば、こんなことにならなかったのかもしれない。

それは、紫音と良が出会い、お互い知り合った次の日の朝に至る。

紫音の説明により、休日であるその日は早速活動をする事となっていた。そのため、朝早くから起床し気合い十分の良。そして活動内容確認のため、生徒会上層部に足を運んだ。すると…。

「今日中にこれをやってください」

眼鏡を掛けたいかにも気の強そうな上級生がそういつて書類を渡した。渡された書類の量は、例えるならヒマラヤのごとく。そびえ立つように積まれている書類の一番上に目をやると。

「生徒会魔法執行部一年部特別課題…？」

気の強そうな女子が、眼鏡をかけ直して言う。

「そう。正直、気は進まなかったけど。現在一年部の生徒会の人数は君を入れて二人。現状を見れば執行部の一年部は必要ないというのが会長の意見よ」

淡々とそして冷静に話す。

良は息をのんで聞いている。

「けれど執行部の一部分を無くすのは前例がない。それで今回は特別にその書類に書いてあることを一週間以内に済ませれば、一年部の存続を認めます」

と、淡々かつ早口に説明を終える。

良は驚きをいい具合に表情に出している。

紫音はどうやら知っている様子だった。

「さて、あなたたち二人でこなせるかしら？」

「なめるなよ。絶っっ対こなしてやる！！」

いつしか良の姿勢が喧嘩腰になっていた。

喧嘩をしたところで勝敗は火を見るより明らかだが。

というわけで、生徒会上層部の課題をクリアするべく、活動がスタートした。

やっぱ失敗した。

どのあたりで失敗したかというと、保健室に入った時点で失敗だった。でなければ、今頃こんな面倒なことをする必要がないのに…。

「えっと次は…」

「田中さんの家の猫探しだよ。行こう、天宮君！」

そう。

課題とはただ単に、自分たちに回ってきた雑務を良たちに回しただけだった。

とはいえ、仕事の量はハンパないが。

魔法執行部には学校内以外にもボランティアに積極的に携わっている。

そして、そのボランティアの依頼を受けるのも生徒会上層部であり、その活動を実行するのは、生徒会の下層部である一年部なのだ。

聞いたところ、一年部の人数が二人を超えたので今まで受けた仕事を一気に一年部に回したのだ。その結果がこれだ。

「天宮君、そつちに猫が行ったよ!!」

「今度こそ捕まえてやる…!!」

猫と睨み合う良。

良が猫に飛びかかる!

それをヒラリと華麗によける猫!

良を足蹴にする。

「ニヤニヤニヤニヤニヤニヤ（人間も大したことないニヤー）」

「言ってくれるじゃねえか!」

なぜ猫の言葉がわかるかは置いて、お互いに火花を散らすように睨み合う。

ジリジリと間合いを詰める。

「ニヤニヤニヤニヤニヤ（捕まえられるものなら捕まえてみるニヤー）」

「面白い、やってやるぜ!」

もはやこの二人に言葉は必要ない。
というか人間の会話ではない。

良は猫に勢いよく飛びかかった。

「ふふ、お手柄だね天宮君♪」
「……おう」

再び任務を完了してご機嫌な紫音。一方良は猫に引つかかれたと思わせる、無数の生傷が顔を彩っていた。

「すごいよ天宮君！ あれだけあった仕事の後一つで終わりだよ！」
「おお…だったらとつとと終わらせようぜ…」

テンション急上昇中の紫音に対して、良のテンションは下がる一方だった。

「んで…最後の仕事はなんだ…？」
「えーつとね…」

紫音は書類の最後の一枚を手に持ち、それを読み上げる。

ヒュオオオオオオオ！

風の音が無駄に大きく聞こえる。

風が空気を切る先にあるのは…洞窟。

洞窟前に男女が2人。

「これもうボランティアの域確実に超えてるだろおおおおっ!!」

良の声が延々と洞窟に木霊する。

「アハハ… まあ天宮君落ち着いて」

紫音が宥めるように、良の肩を叩く。

良は依然として落ち着く様子がない。

「この状況でどう落ち着けて言うんだあ!!」

ここで、良の落ち着けない原因、今日の最終作業について説明しよう。

それは少し前に遡る。

紫音が書類を読み、良がそれをだんまりと聞いていた時のことだ。

「えーっと… 注意、この仕事内容は本人の依頼文をそのまま写したものである。過度の感情輸入をしないでください。だって」

「前置きはいいいからとっと読んでくれ…」

良の突っ込みも、いつもより勢いがない。

「えへへ、えーっと、へー！ 魔法生徒会の諸君こんにちわ 最近
は便利ね〜メールがあるからお手軽に伝えたいことが伝えられて」

「……………」

ここまで全部棒読み（途中何度か噛んだ）である。

「つまらないことは置いて。実はお姉さん、学園近くにある洞窟に恋人から貰った大事なペンダントを落としちゃったの。うふ、駄目なお姉さん。それで魔法生徒会の諸君に是非探してもらいたいの。勿論お礼は出すわよ。ボランティアだけどお姉さんがいいこととしてあげる。それじゃあよろしくね。」
食堂のお姉さんトメより

ここまで紫音全て棒読み。
ワナワナと震える良。

「何が楽しいんだ食堂の糞ババアはあああああつ！！」

怒りに身を任せビリビリと書類を破る良。

「天宮君落ち着いて！ オバサンを悪くいったら駄目だよ」
「やかましいっ！！ チクショー！ 覚えてろよ糞ババア！」

といった感じである。で、現在に至る。

「元気だそうよ天宮君。これが無事に終われば、正式に魔法生徒会の一年部が認めてもらえるかもしれないよ」

「……………ハッ！」

ここで良の脳内で雷の如く思考が蘇る。
そう。

生徒会一年部再建ということは、良が紫音と二人きりでいる時間が拡大に増加するということだ。あのにわか天然かつ、常日頃から絶やさない百点満点のスマイルを一時ではあるが独占できるのだ。
一人の男として、良はまるで森羅万象を司るかの如く立ち上がる。

「行こう桜井。輝く明日が俺たちを待っているぜ」
「え…あ…うん…！」

状況理解よりも先に返事をする紫音。
もはや良の言っていることは世迷い言以外の何語でもないのだが、肝心のそれをツッコミ役が紫音では役不足なため、今回はツッコミ役はいないようだ。

「よし、俺について来い！」

と言って、一人体当たりを喰らわすサイのような勢いで、洞窟に突っ込む。

紫音もそれに遅れて入っていく。

五分後――

「やっぱ入るんじゃないかったあああああ――！」

どこからか、良らしき人物の悲鳴らしき声が聞こえたが、あえて聞こえなかったこととしよう。

page 1 : 少年と少女（後書き）

なんとか二度目の投稿となりました。感想等募集中なのでドンドン送ってください！

良の悲鳴から数分後、ゴロゴロと巨大な岩が勢いよく転がりながら出てきたのだった。そのころ、良たちは――

「天宮君危ないっ!!」

「おおおうっ!？」

トラップに掛かっていた。

よもや、誰がこんな事態を予想したのだろう。

あまりにも天然すぎる紫音は、その余りある天然っぷりを存分に發揮し、本来引つかかるはずはないトラップまで見事に引っかけ、そのたびに良のみが被害を受ける羽目になっていた。

「天宮君、大丈夫？」

「いや…正直無理…」

力子。

再びトラップのスイッチがONになった。

無数の矢が良のみに目掛けて降り注ぐ。

「勘弁してくれえーーーー!!」

悲鳴を上げながらも器用に避ける良だった。

「なあ、桜井…」

「なあに、天宮君？」

「生きてるって…素晴らしいな…」

「？ そうだね…」

幾たびの死線を乗り越えなんとか良は生きていた。体中は切り傷やら擦り傷やらがたくさんあった。ちなみに紫音は当然の如く無傷であった。というかむしろピンピンしている。しかも楽しそうである。

「ふふ♪ 楽しいね、雨宮君♪」

「ああ…俺は非戦なもんだがな…」

紫音は元気にスキップしながら前に進んでいるのであった。ちなみに良は情けない足取りで後を追っている。

「あれえ？」

「…どうした？」

急に紫音が立ち止まる。

そしてだまつたまま、目の前を指差す。

「あれ…何？」

「…？」

紫音が指差した先には、この洞窟には似合わない、あまりにも異様な形の扉があった。そこだけ別空間のような、そのような感じ。

二人とも思わず息を飲む。

「何だ…これは…？」

「わからない…何なのこれ…？」

珍しく紫音も喰らい表情をしていた。

さすがの紫音もこの異様な扉と雰囲気には驚いているようだ。

良は紫音に何か声を掛けようとしたその時――

「すっごーい！」

「ええっ！？」

いきなりのテンション急上昇に驚き声を上げる良。

一方紫音はピョンピョン跳ねながら扉に向かっている。

先ほどのキャラはどこに飛んで行ったんだろうか。

「見て見て雨宮君！ この扉すごいよ！ 一体先には何があるのかなあ！」

「ちょ…落ち着け桜井！」

もはや紫音の暴走を止めるものは誰もいないようだ。

紫音は扉を勢いよく開け、良ももはや止める気はなく、だらだらと

紫音の後に着いていった。

紫音が扉を開けた、その瞬間だった。

「え…？」

紫音の髪が揺れ、数本の髪が切り落とされる。

頬からは僅かに血が流れている。

良はすぐさま飛んできたナイフの方向に視線を移す。

「ほう。こんな辺境の地に、客とは珍しいな」

黒装束を着た、大男だった。

「一体何のようだ？」

黒装束の男は威圧感を振りまき、二人に近づく。明らかに普通の人とは違う。

異様な雰囲気振りまいていた。

「誰…アナタ？」

「ん？ 名乗るほどの者ではない」

それだけいつて、男は構える。

「だが、見られたからには死んでもらうしかないな」

そう言つて男は呪文の詠唱に入る。

良や紫音でさえ、授業以外では魔法を見たことがない。
ましてや攻撃魔法だ。

急に使われては反応できるはずがない。

「フレイムショット」

そう言つて炎の球体を飛ばしてきた。

「危ないっ！」

「ひゃっ！？」

とつさに反応した良が紫音に飛びつき、炎の球体から辛うじて避ける。

だが良は完全には避けきれず、わずかに火の粉が掛かってしまう。

「グッ…！」

「天宮君、大丈夫！？」

「ああ、なんとか…」

「今治すから！」

そういつて紫音は火傷をした良の足に手をかざす。

「ヒーリング」

優しい言葉でそう言う。次の瞬間、優しい光が良の足を包み込み、傷を治した。

「すげえ…」

「天宮君はそこにいて」

そう言つて紫音は立ち上がる。

「天宮君は私が守から」

紫音は1人で黒装束の男に立ち向かうことにしたのだ。良は魔法が使えない。

だとしたら戦えるのは自分だけだと悟ったからだ。

「少女が1人でその心意気やよし。せめてひと思いに一瞬で殺してやる」

男は不適な笑みを浮かべ、紫音に笑いかける。

しかしその笑顔には優しさは存在しなかった。紫音はやられる前にやってしまえという勢いで呪文を放つ。

「アクアシユート！」

先ほど呪文の水属性版といったところだろう。

水の塊が黒装束の男に向かって放たれる。

「フレイムショット」

が、しかし。

明らかに弱点属性である水に対して、炎の呪文は完全に紫音の水の呪文に打ち勝ったのだ。

「きゃあっ!？」

辛うじて炎から逃げる。しかし、圧倒的な魔力の差は歴然だった。

「大丈夫かっ!？」

良がいち早く紫音に駆け寄る。紫音は幸いにも傷一つついてなかった。

地面に手をつき立ち上がる。

「天宮君は下がってて」

紫音はそう言って前に歩みでた。

「ほう、まだ立ち向かってくるか」

「当然でしょ。だって私が天宮君を守るんだから！」

紫音は再び呪文を詠唱し始める。

「アクアブラスト！」

先ほどよりも強い威力の水の塊が黒装束の男に目掛けて放たれる。

「威力だけでは勝てぬぞ」

が、男はヒラリと華麗な身のこなしでそれを避ける。

「まだよ！ アクアランス！」

黒装束を中心に、水の槍が円を描くように周りに現れた。
そして一気に槍が降り注ぐ。

「…飽きたな」

そう言っで、男は呪文を詠唱しだす。

「サークル・オブ・ブレイズ」

男の周囲に炎が放たれて、水の槍を全て消し去った。

「今の私の一番強い呪文だったのに…！」

「終わりだ」

絶望的な表情となる紫音。

一方黒装束の男は当たり前かのように詠唱を終え、呪文を発動した。

「グロウブレイズ」

炎が巨大な爪となり、紫音に襲いかかった。

「きゃああああっ!？」

なすすべもなく、紫音は業火に巻き込まれた。

「桜井っ!！」

良は猛ダッシュで紫音に駆け寄る。

「大丈夫か桜井っ!？」

必死になって紫音を揺さぶるが、微かな吐息を吐く音しか聞こえない。

「……………げ……………て」

「なんだ、桜井っ?」

微かに聞こえてきた声に良はいち早く反応する。微かな声に耳を傾ける。

「天宮君だけでも……………に……………げ……………て……………っ!？」

急に痛くなった。

身体じゃない。

心が痛かった。

女の子である紫音がこんなにも頑張っているのに何も出来ない自分が虚しくてしよつがなかつた。

圧倒的な力の差があるにも関わらず、自分の身より他人の安全を優先する紫音を見てあまりにも自分がちつぽけに見えた。紫音の姿が、あんなにも小さく見えた紫音の背中があまりにも大きく見えるのが悔しくてしよつがなかつた。

ただ、虚しさを紛らわしたかつただけだったのかもしれない。気がつけば、良は手近にあつた長い木の棒で男にあつた殴りかかつていた。

「わあああああつ!!!」

「無駄なことを…フレイムショット」

「ぐあつ!!!」

しかし、そのような子供だましの攻撃が通じるはずもなく、良は火球をモ口に喰らつてしまった。

魔法使いでない良は魔法使いは必ずと言っていいほど使用する魔法障壁を発動してないため、紫音よりもダメージはかなり大きい。

「天宮君っ!」

先ほどのダメージから立ち直つた紫音が良に近づく。

「待ってて! 今回復魔法を…!」

「……大丈夫だ…」

「大丈夫ってその傷…！」

良は紫音の回復魔法の発動を拒む。

良は紫音が上げようとした右手を強く握る。

「桜井…」

「喋っちゃ駄目だよ！　こんなに傷が酷いんだから…！」

紫音の言葉ばかり今や完全に無視で良は喋り続ける。

「俺さ…もつと強くなるから…」

「えっ…？」

「お前に助けてもらわなくてもいいくらいに…強くなるよ…」

「天宮君…」

荒い息を振り絞り、良は続ける。

「それで…お前を守るくらいに強く…」

「御託はそれくらいにするんだな」

痺れを切らした黒装束の男は呪文の詠唱を始める。

「2人仲良く死ぬがいい。グロウブレイズ」

再び、炎の爪が襲いかかる。

俺は一体何をしているんだ。

なぜこんなことにあつたなっている？

なぜこんな痛い思いをしなければならぬ？

なぜこんなに辛いんだ？

楽になりたい。

そうすれば、この苦しみからもきつと解放される。

そうだ。

早く、この炎が自分を消し炭にして…

「天宮君、逃げてっ！！」

違う。

こんなのじゃない。

ここで死んで何になる。なんにもならないじゃないか。

無駄な考えは捨てる。

今考えることは一つだけ。

ただ目の前の奴を護ることだけだ。

一陣の風が吹いた。

炎は跡形もなく消えていた。

驚きを隠せない男は動揺が混じった声で言った。

「貴様…何をした？」

そこには、風を纏った良の姿が確かにあつた。

「天宮君…」

「悪い桜井、ちょっと下がっててくれないか？」

「うん、わかった」

数歩ほど下がる紫音。

「待たせたな。決着をつけようぜ」

「ほう。さきほどとは別人だな。で、そのチンケな風で一体何を見せてくれるつもりだ!？」

そういつてサイズは小さいが無数の数の炎を飛ばした。

しかし、良は冷静なままだった。

そして右手を炎に向ける。

「風障壁」

風の盾が炎を全て遮った。

「なっ…!」

「今度はこっちの番だ!」

そう言つて、右手に風を集中させる。

「風矢撃!」

風の矢が、男に向かって放たれる。

男はとつさに炎で防御しようとするが、回転を加えた風の矢は盾を貫き男に直撃した。

「クク…面白い。そうでなくてはな!」

そう言つと、男は渾身の魔力を呪文に込め始める。

次の呪文で決めるため、詠唱を完成させる。

「果たしてこの呪文に耐えきれるかな？ ブレイズイグニッション
！！」

炎が波のように良と紫音に襲いかかる。

「天宮君っ！！」

「大丈夫だ。お前は、俺が護ってやる」

「天宮君…」

小さな、けれど頼りになるような笑みを紫音に向ける。
そして炎に向き直る。

「烈風陣円舞！」

良の周りを暴風が覆う。炎は完全に打ち消された。

「バカなっ…！」

「遅い」

男がよそ見している瞬間に、良は足下に風を集め、背後に回った。

「くらえ、風華烈衝！！」

風を拳に一気に収縮させ、解き放った。

「ぐおおおおっ！？」

「へ…どうだ…」

良はそのまま気を失った。

「……君……みや君……」

「……んっ……」

「いい加減起きて天宮君！」

「ぐぼうつっ！」

目覚めようとした瞬間、紫音による腹部への鉄拳により完璧に目が覚めた。

というか、あれほどの傷を負ったのだ。

いくら紫音の鉄拳でもものすごい痛い……ほどでもなかった。見ると傷はほぼ完治していた。

「……すまん。また迷惑かけたな……」

「うつんっ！ そんなことないよ！」

紫音は力いっぱいに否定する。

「それに……すごく格好良かった……」

「……なんか言ったか？」

「何でもない、何でもないよっ！」

聞こえないように言っ たつもりだが微かに聞こえたらしく、その質問に焦る紫音。

「さ、天宮君！」

「なんだ？」

「帰ろう！」

立ち上がって、手をさしのべてくる。

「ああ」

ゆっくりとその手を取り立ち上がった。

「そういえば、何か忘れてないか？」

「何も忘れてないよ」

「だよな」

疑問を抱いたまま、2人は洞窟を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3006e/>

がくレボ！～学園レボリユーションズ～

2010年10月9日03時19分発行